天神のこし古墳

1976・3

天神のこし古墳調査会

序

古来春日居の地は中国の陰陽説に言う風水の地一東北西の三方に山を負い南に向って河川の流れる一言わば永久に残る地として着目され、人類の生存する最適の地として祖先が築き上げたものと考えられる。

この山裾には大小数多くの古墳が点在しているが昨年の春3月承水路横巾舗装工事の際従来古墳だろうと言われていた所から直刀、馬具等が掘り出され同年8月山梨県教育庁文化課、並びに専門家の指導のもとに発掘調査が行われ、この古墳に「天神のこし古墳」と名づけられた。

この正式な調査は本町としては最初のものであり貴重なものであるが、峡東地区、甲府盆地を一望のうちにおさめられる小高い場所にあるこの「天神のこし古墳」の姿を長く保存し、この古墳の占める位置を明らかにしようとするものである。

炎天下発掘に従事して下さった多くの関係者に深甚なる謝意を表す次第である。

昭和51年3月31日

春日居町教育委員会

教育長　神沢孝貴

春日居町古墳一覧表

No.	名称	所在地	遺存状況	備考	No.	名称	所在地	遺存状況	備考
1	朝日塚	鎮目小字菩提	A	積石塚	16	はたおり塚	鎮目小字平林	C	
2	備前塚	〃　日蔭	A		17	無名塚	〃　日蔭	B	
3	船石塚	〃　〃	A		18	狐塚	〃　〃	A	数段の石垣をめぐらす
4	日蔭塚	〃　〃	A		19	無名塚	〃　寺の前	C	(寺の前古墳)
5	笹原塚上	〃　日向	A		20	〃	〃　〃	B	
6	〃　下	〃　〃	A		21	へび塚	〃　〃	B	
7	山伏塚	〃　〃	A		22	無名塚	〃　〃	C	
8	菩提塚	〃　菩提	A	円心円状に2段の石垣をめぐらす	23	〃	〃　〃	C	
9	夫婦塚上	〃　日向	C		24	御室山塚	〃　日蔭	A	おめぐりさんともいう積石塚
10	〃　下	〃　〃	C		25	天神のこし古墳	〃　関東林	B	
11	日向塚	〃　〃	A	道下の塚ともいう	26	田島稲荷塚	〃　上町田	C	
12	浄念塚	〃　〃	C		27	天神塚	〃	A	円心状に3段の石垣をめぐらす(八幡塚古墳)
13	蝙蝠塚	〃　関東林	A	おしも山の塚ともいう	28	鎌田塚	〃	C	
14	平林塚	〃　平林	C		29	狐塚	熊野堂小字狐塚	C	甲斐国志に4間に5間、穴中に狐子を育すとあり。
15	しびと塚	〃　〃	C		表紙古墳地名表				

(注) A.石室など凡ね残存　B、一部残存　C、痕跡のあるもの、消滅したもの。

本町の古墳概況

はじめに　本県の古墳の大部分は、甲府盆地周辺、殊に南側の曽根丘陵から勝沼町に至る一帯と、北側の敷島町・甲府市から山梨市西部に至る一帯に濃密に分布している。

春日居町もこの濃密分布地帯の一部をなすわけで、甲斐国志（今から１７０年前）には「鎮目村――本村ハ神社仏刹ノ地モ旧ク、山内ニ石室三十余ヶ所存シテ……」と記し、なお、上岩下村・桑戸村等にかけて石室多数が存在すると述べている。石室というのは横穴式古墳を指すものとみて間違いないが、今回筆者の調査しえた所では、別図に示すように29基にすぎなかった。昭和30年頃までは、近くの大蔵寺裏手の山腹に数基、甲府市楼井町に十数基、横根町に数十基の古墳が存在していたが、春日居町地内にも江戸時代頃には現在よりも遙に多数の、恐らく百基に近い古墳が存在して、横穴式円墳の群集墳を形づくっていたものと想像される。

それは本町に、国府・鎮目や寺本廃寺址、山梨岡神社・甲斐奈神社等の古社寺など、甲斐古代史の一時期における中心地であったことを示す遺跡・文化財が多数存在することと密接な関連をもつものである。

しかし貴重なわれわれ祖先の文化財たる古墳は今や急速に破壊され消滅しつつある。別表は現在において知り得る古墳分布の一覧表であるが総数29基、このうち現在、石室その他古墳の概況をうかがえるもの13基、わずかに一部残存するもの４基、その他の大部分は太平洋戦争後に破壊、撤去されて、今わずかに人々の記憶と記録に断片を残すのみとなっているものである。

分布状況　本町の古墳は分布図及び別表にみられるように、大部分が旧鎮目村の地籍、それも山地（やまぢ）とそれに続く地域とに分布している。即ち保雲寺近辺とその北の山沢川にそって菩提山長谷寺（ちようこくじ）方向に登る３Ｋｍ近い奥行の谷の両側斜面がそれで、最高地点の朝日塚は標高約800ｍ、下の平地との比高は500ｍ余である。朝日塚から№７の山伏塚までの７基と蝙蝠（こうもり）塚、御室山塚は比高の大きい山林中にあるわけだが、このほかにも未発見のものが予想される。耕地と居住地域となっている平地にもかってはいくつかの古墳が存在していたことが地名や伝承などからうかがえる。

形態　遺存の状況はさまざまであるが、もとの円墳の封土は殆んど失われて、横穴式の石室を露呈しているものが多い。石室の規模は奥行は５ｍ前後、間口1.3 ｍ前後のものが最も多く、奥行９ｍ前後、間口1.6～2.1ｍという大きなものは、山伏塚・夫婦塚(上)・こうもり塚・日蔭の狐塚・八幡塚の５基である。

朝日塚は墳丘を自然石塊で盛りあげた所謂積石塚の形式だが、岡神社背後の山中にあるおめぐりさんの塚も同形式である。非常に特異な形式は日向（ひなた）塚と近年、破壊されてしまった二基の夫婦塚で、石室の部分を外側から太鼓の胴形あるいは六辺形に整然と積み上げたもので、かってはそれを土で覆っていたものと想像される。墳丘全体が石室を遠まきに石垣で二段、三段にまきあげた形になっているのは菩提塚・死びと塚・八幡（はさまん）塚であるが、この石垣は後世の耕作者の手になるものであろう。

副葬品　本町の古墳の学術的発堀は、今回の天神のこし古墳が最初であるが、昭和23年に筆者も田島稲荷塚を調査して須恵器・管玉・馬具の一部を発堀したが、その後この塚を撤去するさい漢鏡一面も発見された。昭和39年、たまたま鎮目の原田富一氏によって№19号の無名墳（寺の前古墳）から遺物が発見され象目に触れたが、その他、耕作のさいなどに以上の古墳から発見された若干の遺物が小学校や個人によって保管されている。これら副葬品は時代的には古墳時代後期から終末期にかけてのもので、本町に甲斐の国府や軍団がおかれた時期を７世紀前後の間を推定するならば、それと密接な関連があることを示している。

（野沢）

発堀経過

天神のこし古墳が発見されたのは昭和50年３月４日のことである。関東林沢南の尾根を横走する農道から尾根に登る道の拡張舗装工事中に直刀２本、馬具１個が発堀された。この発見は即日町教育委員会に連絡され、町文化財審議委員長野沢昌康氏及び県文化課へ視察依頼がなされた。翌日野沢氏と文化課末木、森本はこの発見物が古墳からの出土遺物であり、出土地は古墳であるとしてその保存が望ましいとした為、地元及び町はこれを残すこととして、保存方法を検討していたが、同年初夏に徳条部落老人会の憩の場として利用する意見が持ち上り、町教委と協議の結果古墳の発掘調査を実施して破壊状態を調べ、史跡として残すか東屋を建設するのか結論を出すこととなった。

この為緊急発掘調査経費の補助金申請書を７月16日に文化課へ提出し、８月12日に交付決定がなされた。調査は昭和50年８月24日から31日まで８日間行なわれた。まず盛土中央に十字にトレンチを設定し、２日目になって奥壁、側壁が発見された。石室内には礫が相当入り込んでいたが、手際良い地元の人々の働きで順調に掘り下げると、敷石の上や間から金環、鉄鏃、刀子等が掘り出された。測量実測は日大、明治、国士館大学生らの協力を得て無事終了した。

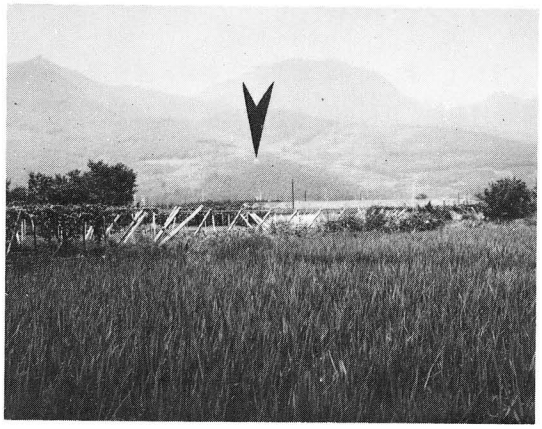
なお調査組織は次のとおりである。

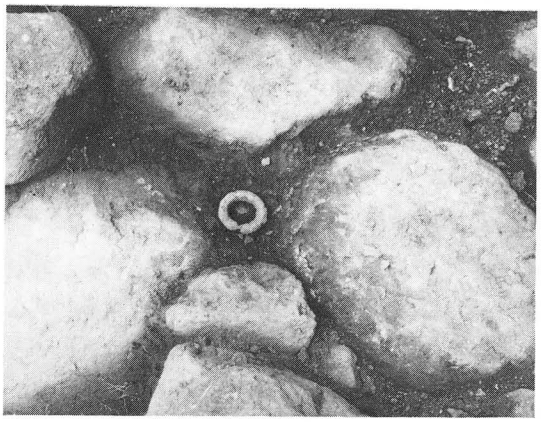
○調 査 主 体：春日居町教育委員会

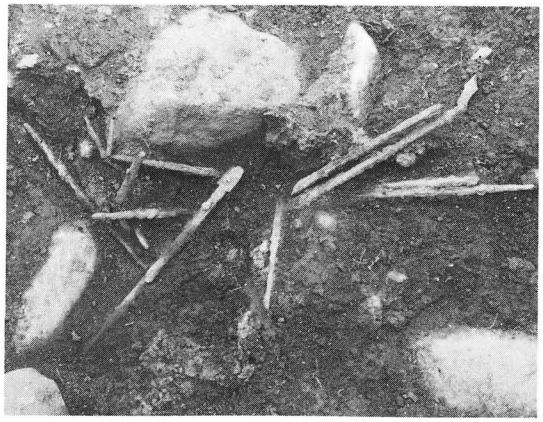
○調査担当者：野沢昌康（県文化財調査員）菊島美夫（日本考古学協会員）

○調査参加者：春日居町教育委員、文化財審議委員、議会議員、社会教育委員
青年団有志
地元徳条区有志並老人クラブ

○調査協力者：末木健、山崎金夫（県文化課）、伊藤恒彦（日大）、井川達雄、米田明訓（明治大）、佐野勝広（国士館大）







石室構造

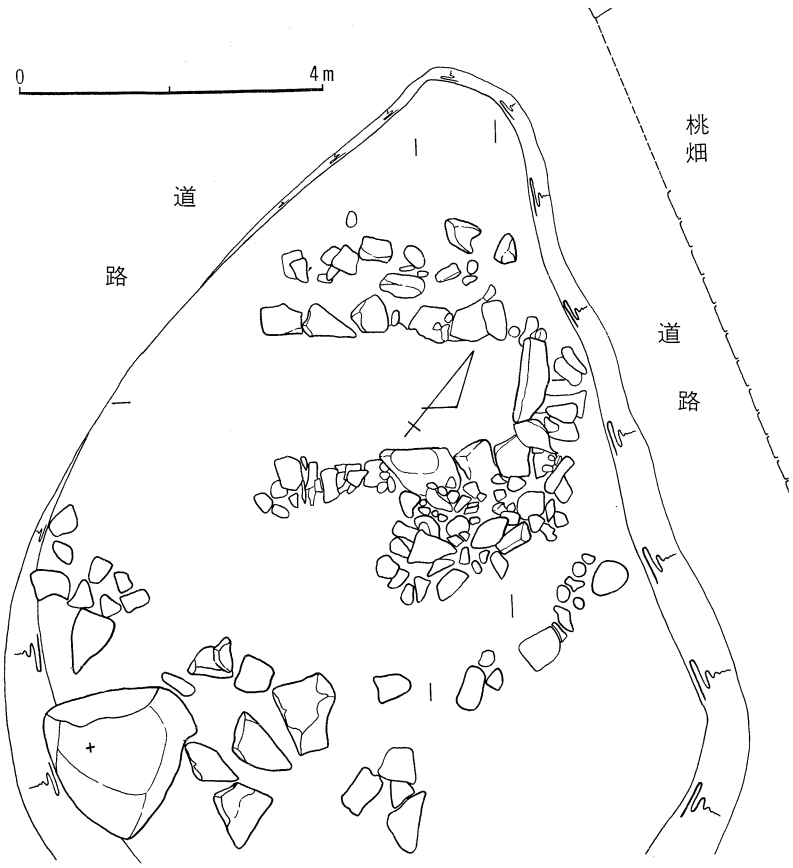
天神のこし古墳は片袖型横穴式石室で、主軸はN50°Eである。現存する奥壁から残存している羨道敷石入口まで5.7mを計る。石室内は袖によって玄室と羨道とに分れており、袖部の側壁は旧前の破壊によって抜き取られている。しかし石室内敷石が袖の姿に残っており推定が可能となった。

奥壁は90×130cmの1枚石が使用され、側壁は北側が1段目5個、2段目3個、3段目1個。南側は1段目6個、2段目3個が残っている。天井の高さは1.5m前後であろうから半分が残っていたことになる。玄室巾は奥壁手前約10cmで1.3m、中央部1.65m、袖近く1.6mでやや胴張形のプランを呈する。羨道巾は玄室の接合部で1.4m、敷石南で1.6mを計る。通常袖は壁と平行であるものが多いが、この古墳の場合は三角形に突出している様である。

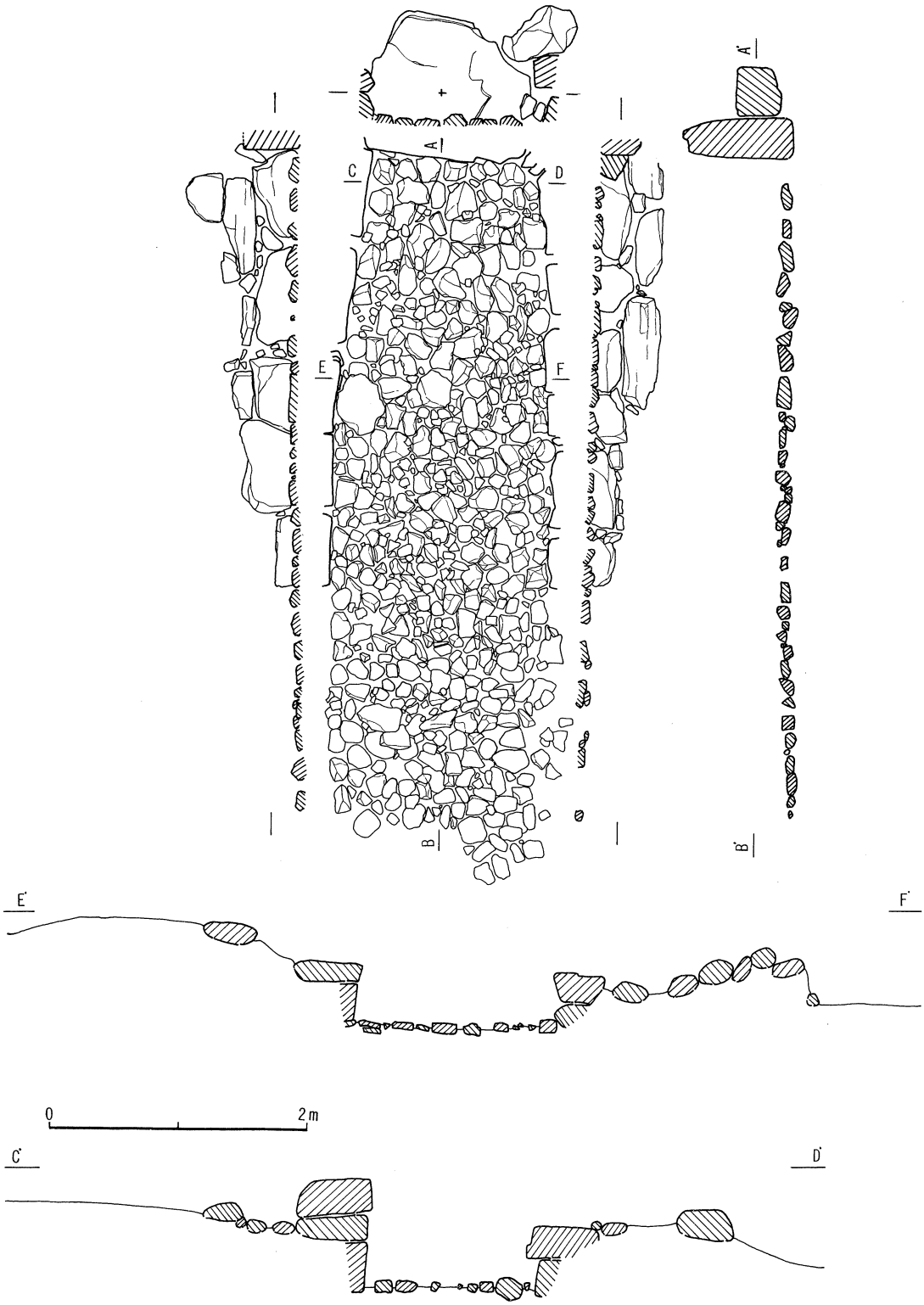
石室内には敷石があり玄室内は角礫が多く、羨道部は円礫が多い。又玄室内奥半分は比較的大きな礫が使用されており、前半分は25cm以下の礫で敷かれる。袖部と推定する場所と円礫の敷かれる範囲がほぼ一致する為、角礫部を玄室とすることができる。この羨道部円礫敷石はやや傾斜して下っており、玄室の方が高くなっている。

次に裏込石の状態について見ると、南北側壁とも一段目には裏込されておらず地山を切り込んで据付けてある。北側壁2段目裏込石は側壁と平行して直径40～50cmの礫が10個位置かれている。奥壁裏込石はほとんど抜き取られ、下部に幾つか残っている程度であり、南側壁東側は大小礫が充分に残っている。羨道部及びその付近の側壁は抜かれているので裏込石も見当らない。なお、南側に石室を中心として裏込石から約1m離れて環状列石がある。恐らく土溜用の列石であろう。盛土内及び土溜列石石組付近より平安期に比定される須恵器等が出土していることを考えると、すでにその頃盛土が動かされていたと言える。

また第3図に示す遺物の出土状態を見れば分るが、追葬及び石室破壊がされた時に遺物の原位置が移されているものと思われる。　（末木）



第1図墳丘図



第2図石室実測図

出土遺物

本墳出土の遺物類を列挙すると、次のようになる。

1、武器類

大刀　4振、石突　1個、刀子　5本、鉄鏃35本分

2、馬具類

轡　1組、鞍金具　1個

3、装身具類

金環　3個、銅環　2個

4、土器類

土師器　12片、須恵器　10片

以上、73点が今回の調査によって得られた総数である。しかし、石室の大半が壊されており、これが副葬品の総てかどうかは疑問である。

(1)　武器類

大刀はすべて素大刀身である。素大刀身1（第4図1）は、現存全長85.2cm、関部巾3.7cm、重ね0.8cm、茎部長さ8.7cmの片関有角式・平棟平造りである。目釘孔あり。素大刀身2（同2）は、現存全長65.4cm、関部巾2.9cm、重ね0.7cm、茎部長さ8.4cmの両関式・平棟平造りである。刀身に僅かに反り（中央部で2㎜）が見られる。素大刀身3（同3）は、現存刀身部長24.4cm、刃巾2.2cm、重ね0.4cm、茎部長さ7.7cm、関部巾2.2cm（推定）の細身の両関式・平棟平造りである。鉄製目釘が装着している。この外に鉄製目釘付の茎部片(同4)、刀身片（5）が出土した。

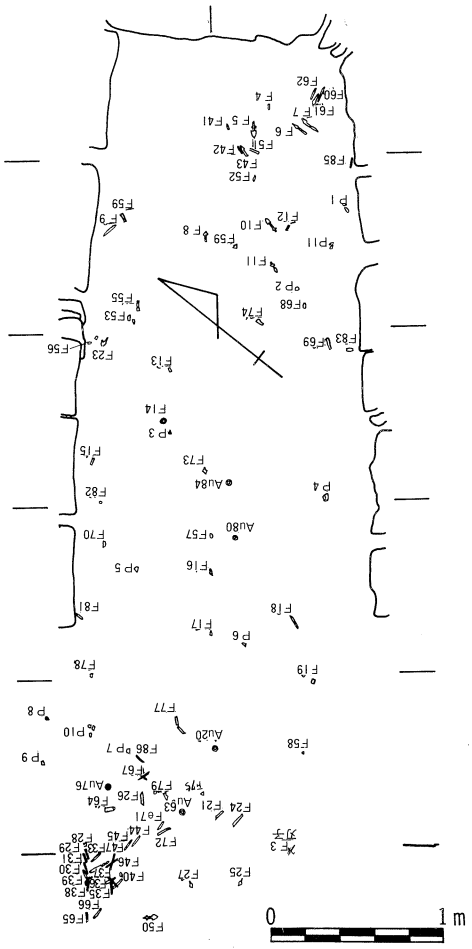
刀装具には鐔、鞘口金具がある。鐔(第4図6)は、六窓の鉄製到卵形鐔である。鞘口金具（同7・8）は鉄製である。鐔は素大刀身1に、鞘口金具は素大刀身2・3のいずれかに装着されたものであろう。

石突（第5図・1）は、鉄製品で上端を欠く。現存長5.1cm。

刀子（同2～6）は、5本出土した。

鉄鏃は、2種類に大別される。A類(同7～15)は箆被平根式、B類（同16～43）は、箆被尖根式である。

A類は6種類に細別され、造りはすべて平造りである。A_1類(同7・8)は、三角形広峰長茎箆被式類似品、A_2類(同9)は、三角形狭峰腸抉箆被式類似品、A_3類(同10・11)は、A_2類に類似するが、A_2類に比べ鏃身が短かく丸味をもつものである。A_4類(同12)は、五角形腸抉式とでも呼称すべきもので、底が腸抉式、A_5類(同13)は、五角形式類似品、A_6類(同14)は、砲弾形態のもので、底の片側に腸抉がある。同15は底に腸抉がつくものであろう。



第3図遺物出土位置図　F鉄製品、Au金環

B類は6類に細分される。B_1類(同16～18)は、片丸鑿箭式類似品、B_2類(同19・20)、B_3類(同21)、B_4類(同22)はそれぞれB_1類に類似するが、

鏃身が短かいものや、底が腸抉状等の差違がある。B_5類（同23～33）は、片関片刃箭式類似品で、鏃身の寸法に4種類ある。B_6類（同34～43）は、端刃鑿箭式類似品である。第6図1～11は茎部等である。

馬　具　類

轡（第6図12）は、鏡板が鉄棒製環状(楕円形)、立間部の鈑具が板状で、舌が取付けられている。銜は丸形断面の鉄棒の両端を環状に曲げた2連式のもの、引手も銜と同じ造りで、両端を環状に曲げたものである。

鞍金具（同13）は、鞍金具中の鍛具であろう。

装身具類

金環（同14～16）、銅環（同17・18）のみで、金環は銅芯に金泊をはったものである。15・16が対と思われる。

土　器　類

須恵器は、大形甕類の破片のみで盛土内より出土した。土師器は、杯・鉢・甕形土器がみられる。杯1（同19）は、外面が、内面が黒添色である。杯2（同20）は、胴部に斜位の篦削、内面に篦磨、底が静止篦削である。杯1・2、鉢（同21）、甕（同22）が石室の覆土内出土。

不明金具

同24は、全長2,7㎝、径2～5㎜。鉄製短棒の両端を円筒状に丸め、これを2弁の花形をつけた鉄製の円筒に差しこんだものである。

本墳の出土遺物は、後期古墳の一般的様相を見せるが、六窓到卵形鐔、鐔具は特殊なものといえる。六窓到卵形鐔は、素太刀身1に組合さるもので、6世紀後半～7世紀後半[注1]に見られる椎頭大刀に通有的に装着されたものである。県内ではむじな塚古墳出土例[注2]が知られる。また、素太刀身1の茎部形態は、刃関に角を有し（片関有角式）かつ、刀身と比べ短く、御坂町下黒駒・無名古墳[注3]に類似品が知られる。鍛具は、鞍金具の一つで、これより鞍が副葬されたことが、ほぼ確実に推定できる。春日居町、狐塚古墳[注4]に知見例がある。この外、石突や不明金具は、留意する必要があろう。石突は、鉾等と組合されるものであり、鉾の存在が推定できる。鉾は豊富村・王塚古墳[注5]、八代町・狐塚古墳[注6]に出土例がある。不明金具は、楯か靫にとりつけた金具と見られ[注7]、八代町・石塚古墳に類似品がある。

鉄鏃は、特に春日居町・寺の前古墳出土品に近いものである。土師器は少なくとも2時期に区別され、第3図19、21、22が晩期Ⅰ（8世紀代）、第3図20は晩期Ⅱ－2～4式（10世紀後半～11世紀前半）[注9]に置かれる。須恵器片の年代推定は困難である。

本墳は、石室（7世紀後半）と椎頭大刀の時期に重複が見られ、略7世紀後半に築造時期が求められるが、鉄鏃や馬具からは7世紀末頃まで下降する要素があり、石室と副葬品との間に時間的差位が生じ、金環の複数個存在と合せると追葬があったと見られるが、土器類は覆土内出で、年代判定資料とできない。

本質の被葬者の性格は、立地が山腹舌縁部の独立墳であり、石室も比較的大きく、副葬品に椎頭大刀、鞍、楯などの副葬が推定され、首長ないしそれに準ずる者で、武器類が県内例に比べ豊富であり、軍事的掌握者とも考えられる。　（菊島）

注1・7『掛川市宇洞ケ谷横穴墳発堀調査報告』静岡県教育委員会

注2　『史跡名勝天然記念物報告書』第8号

注3　拙稿「山梨県各地古墳出土遺物集成図」『甲斐考古』10の3

注4　拙稿「狐塚古墳（春日居町）稲荷塚（一宮町）及び葉舞場古墳（後坂町）出土遺物の集成」『甲斐考古』9の2

注5　『史跡名勝天然記念物調査報告書』第5号号　第5号

注6　5、『八代町誌』

注9　拙稿「山梨県に於ける晩期土師式土器編年試論」『甲斐考古』12の2

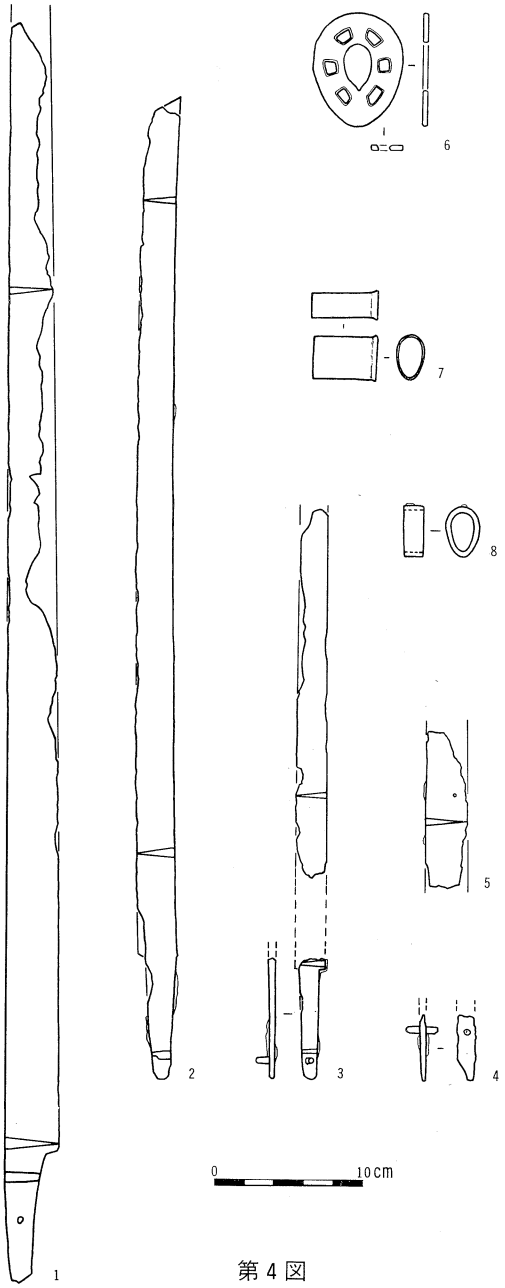
むすび

春日居町に古墳が築造され始めたのは、横穴式石室が普遍的に採用された後期古墳の中でも、古くは逆のぼれない。地続きの甲府市に万寿森古墳加牟那塚古墳、山梨府岩下に岩下1号墳という6世紀後半頃に比定される巨大な古墳が存在するのに、この中間地帯の春日居町には、現在まで6世紀後半頃まで逆のぼれる古墳の確認はない。春日居町の最古の古墳は、天神塚古墳（鎮目上町田）と見られ石室も大きく略7世紀中葉に置かれる。天神塚古墳を初現とし、以後築造された古墳は、春日居古墳群として理解され、その分布は野沢昌康が述べているとおりである。

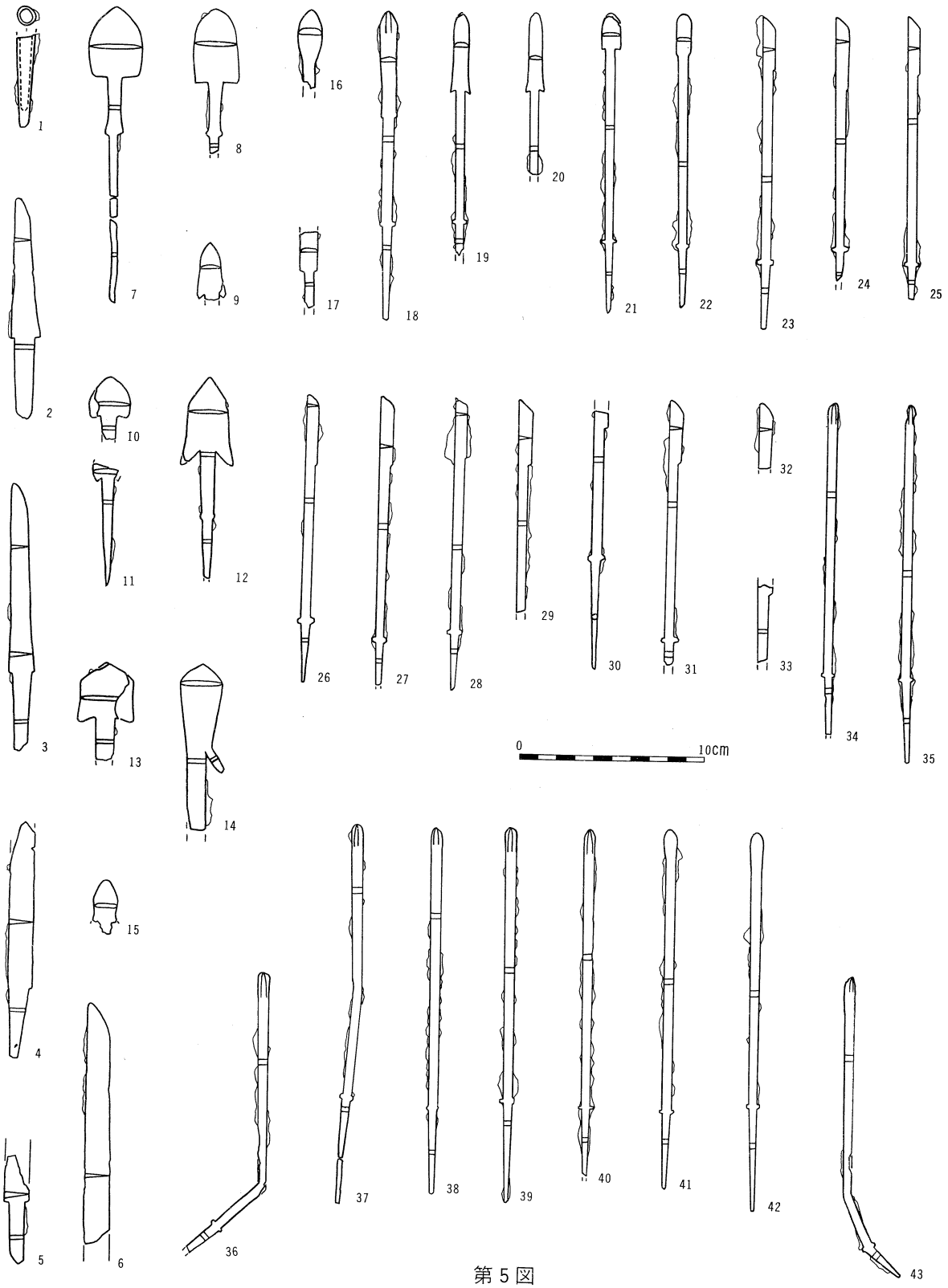
春日居古墳群は、形態的に大きく2つに分れる。すなわち、一般的な円墳・横穴式石室の形態と、積石塚（竪穴系横穴式石室）の形態をとるものとであり、分布にも相違が見られる。積石塚は春日居町に5基確認されており、山腹から山頂部に渡って分布する。一方、円墳・横穴式石室の古墳は、大半が山据付近に見られ、山腹付近には極く少数例が知られるにすぎない。円墳、横穴式石室の古墳の間にも分布に差違があり、東群（吾妻屋山南東斜面）グループと、西群(大蔵経寺山北東斜面)グループに分たれ、東群は、天神塚古墳、蝙蝠塚古墳、天神のこし古墳等で、概して独立墳的立地で、石室規模も大きい。これに比べ西群は、狐塚古墳、寺の前古墳等を中心とするもので、群集的立地で石室規模も、狐塚古墳を除いて東群より縮小傾向にある。

春日居町に存在する積石塚の年代は、推定の域を出ないが、春日居古墳群の西隣りにある甲府市、桜井古墳群中の桜井B号墳（積石塚）が、7世紀中葉以降に比定されており(注3)、春日居町に存在する積石塚は、桜井古墳群の最東端に入るものと考えられる。従って、円墳・横穴式石室の古墳の年代と略軌を一にしているものと考えても、大過ないであろう。

積石塚の被葬者を帰化人系集団の統率者と想定する意見は多いが、その是否は別として仮に積石



第4図


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
0
10cm

第５図

墳を帰化人系集団に係るものと考えるならば墳群には、大きく2つの古墳築造集団の系譜、すなわち、積石塚に係る集団と、円墳・横穴式石室の古墳に係る集団とが、略同時期に存在していたことになる。では円墳・横穴式石室の古墳は、どの様な系譜の集団を想定できるであろうか。春日居古墳群で特徴ある副葬品を持つのは、

狐塚古墳　銅鋺、馬具（鞍、轡2）(注4)

寺の前古墳　銅鋺、馬具（轡3、雲珠）(注5)、直刀2、刀子1、鉄鏃31

天神のこし古墳　馬具（鞍、轡）、直刀4、刀子5、鉄鏃30

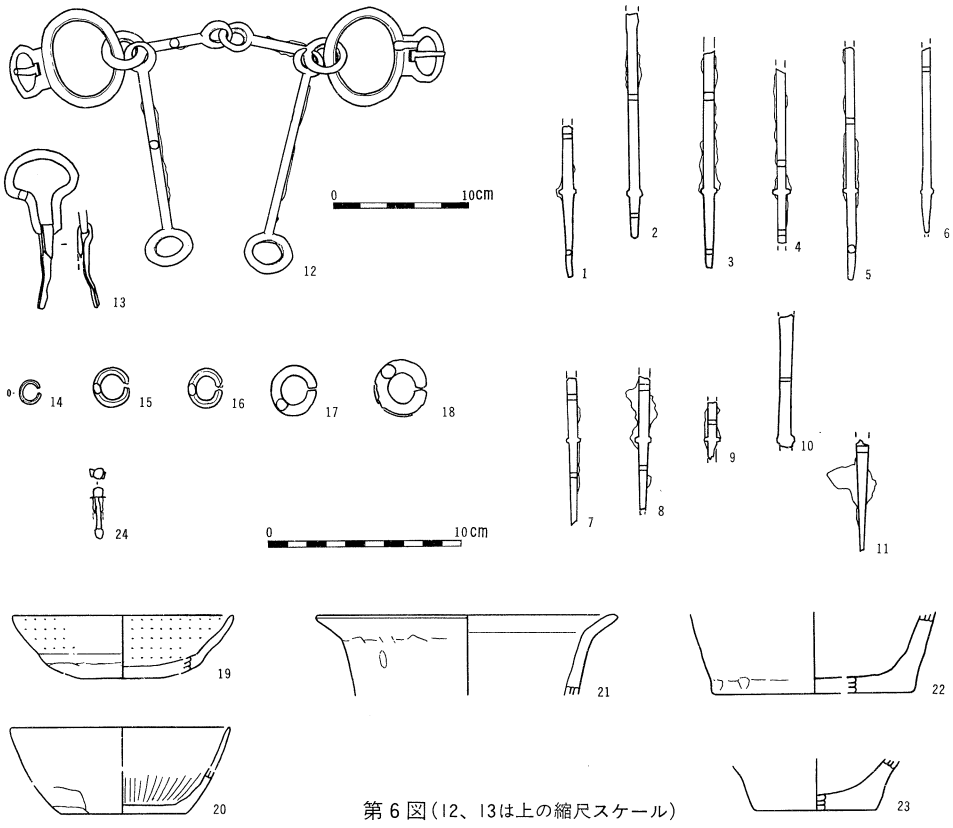
の3古墳で、次の様になる。

1、銅鋺の存在

2、馬具、直刀、鉄鏃などの豊富な武器類、

銅鋺は、舎利容器としてもちいたものと理解され、県内ではこの2例のみである。全国の出土例では、銅鋺出土の古墳の近くに古寺が多く存在するようであり、本例もまさにそのとおりである。東方1,5kmの同町寺本に寺本廃寺がある。武器等の量は、この時期になると一般的に少量となるが、県下の古墳と比べると、やはり量的に多いのであり、軍事的色彩を強く窺わせる。更に、狐塚古墳の鞍、寺の前古墳の金銅製轡・金銅製雲珠、天神のこし古墳の鞍・椎頭太刀などの特殊な遺物を副葬しており、被葬者の強力な支配者層を想定できる。横穴式石室が家族墓と理解されているので、追葬の有無は別問題として、また、東群と西群とにかかわらず、春日居古墳群の円墳・横穴式石室の被葬者像を3古墳より、軍事組織を掌握し、しかも仏教に帰衣した首長あるいは首長に準ずる者と想定したい。

前述の寺本廃寺は、国分寺より更に古い白鳳時代に建立された（7世紀末～8世紀初頭）と考えられており、春日居古墳群の築造年代に極めて近接している。寺本廃寺を「或氏族の背景によって



第6図（12、13は上の縮尺スケール）

創建された[注6]」氏寺と見るならば、時間的接着性から狐塚古墳、寺の前古墳の被葬者を中心とする系譜の氏族によって、建立されたものであろうと考えられるのであり、彼らに、寺を建立する財力・権力があったことは、副葬品の特殊性から窺い知ることができよう。

古代甲斐の氏族に関する資料は僅かであるが、直姓氏族として三枝直（山梨郡、続日本後記）、小長谷直（八代郡、山梨郡、続日本紀、駿河国税帳）、壬生直（巨摩郡、三代実録）、大伴直（山梨郡、続日本後記）、日下部直があり、「この五氏当りが、甲斐の古代氏族の中枢部をなしていたと思われるのである。そして壬生直を除いては、古代の甲斐国の政治的中心地である八代、山梨両郡方面に根拠をもっていた[注7]」のである。春日居町は古代には、山梨郡大野郷に属し、大野郷（山梨市大野）に特に三枝氏に因縁ある橋立明神が存在することから、三枝氏の支配する地であったことも推定できるが、しかし、続日本後記等の記述が9世紀前半のものであるから、直接春日居古墳群の被葬者に結びつけるのは困難であろう。（菊島）

注1、小林広和外「山梨県の大型横穴式石室墳」『信濃』27巻4号

注2、拙稿「山梨県内各地古墳出土遺物集成図」『甲斐考古』10―3

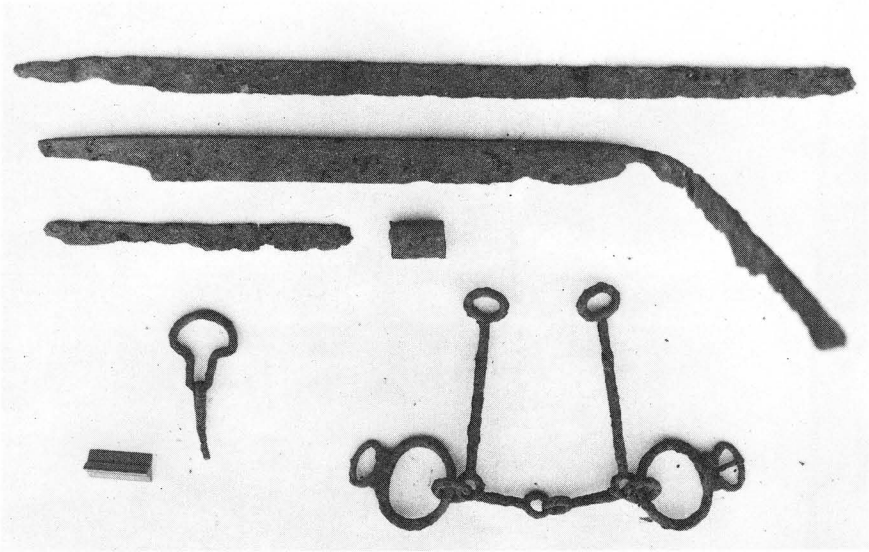
注3、『甲府北東部に於ける積石墳、横穴式古墳墳の調査』甲斐古墳調査会

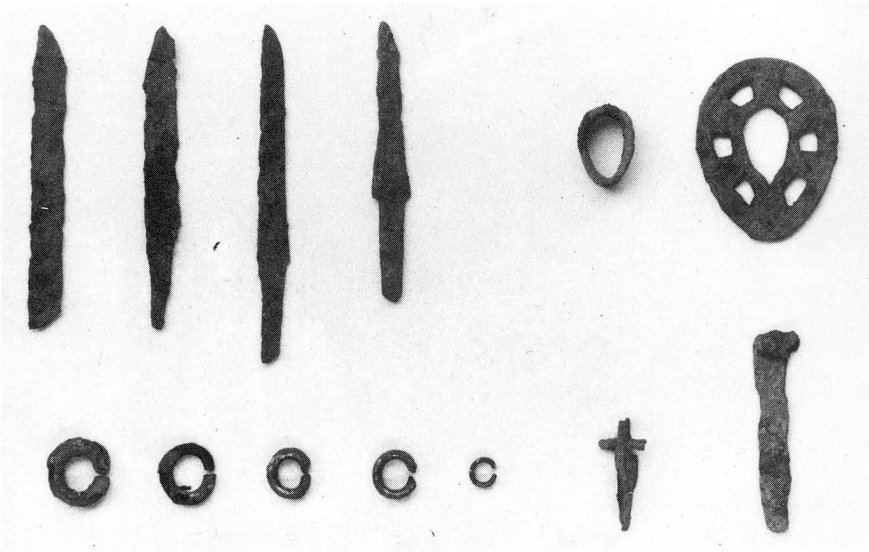
注4、拙稿「狐塚古墳(春日居町)積荷塚（一宮町）及び葉舞場古墳(御坂町)出土遺物の集成」、『甲斐考古』9の2

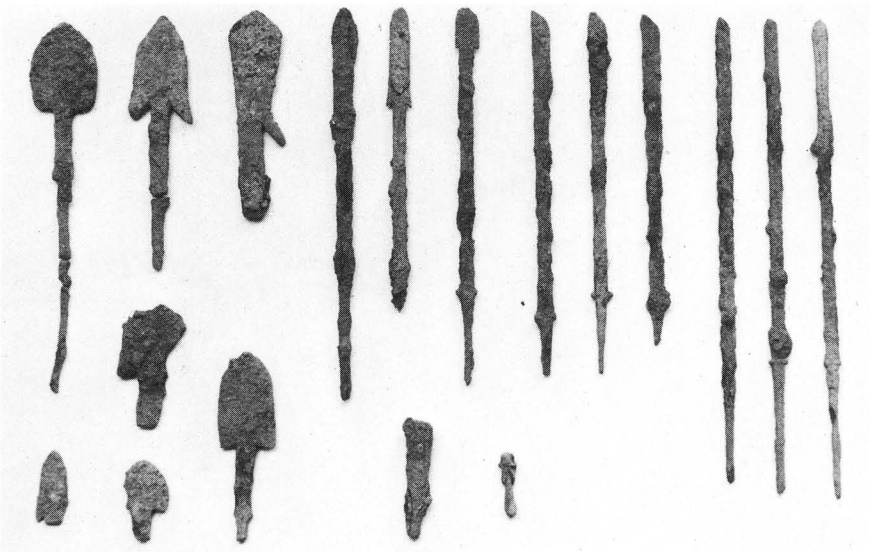
注5、拙稿「寺の前古墳出土遺物集成図」、『甲斐考古』8の1

注6、石田茂作「甲州寺本廃寺の発掘」『考古学雑誌』36巻3号、木下良氏は「国府跡研究の諸問題―甲斐国府跡をめぐって」『文化史学』21で国府寺説をとる。

注7、磯貝正義「甲斐の古代氏族について」『甲斐史学』丸山国雄会長還暦記念特集号。







昭和51年 3月25日 印刷
昭和51年 3月31日 発行

天神のこし古墳

発行所 山梨県東山梨郡春日居町
天神のこし古墳調査会
印刷所 甲府市丸の内二丁目7—24
株式会社 少国民社